# 第５３回津市総合教育会議議事録

日時：令和５年１０月４日（水）
午後４時開会
場所：津市教育委員会庁舎４階　教育委員会室

| | | |
|---|---|---|
| 出　席　者 | 津　市　長 | 前　葉　泰　幸 |
| | 津市教育委員会 | 教育長　森　昌　彦 |
| | | 委　員　西　口　晶　子 |
| | | 委　員　富　田　昌　平 |
| | | 委　員　田　村　学 |
| | | 委　員　山　口　友　美 |

事務局　それではただいまから第５３回津市総合教育会議を始めさせていただきます。最初に前葉津市長から御挨拶をお願いいたします。

津市長　ただいまから第５３回総合教育会議を始めます。教育大綱の議論になりますが、よろしくお願い申し上げます。

事務局　ありがとうございました。それでは、本日の「１　協議・調整事項」であります「津市教育大綱の策定にかかる検討案について」に入りたいと思います。まずは、事務局から御説明させていただきます。

教育事務調整担当参事（兼）教育事務所調整担当参事・教育総務課長　教育総務課長でございます。着座にて失礼させていただきます。

それでは教育大綱につきまして御説明させていただきます。お手元にお配りしました資料のうち次期教育大綱の策定スケジュールということで、本日の協議を入れまして、４回程度の御協議をお願いしたいと考えてございます。お手元にお配りしました資料に基づきまして御説明させていただきます。

まず資料１「令和５年度津市総合教育会議懇談会の結果について」ということで、８月２日と７日に開催されました懇談会にて、主にいただきました意見の内容をまとめさせていただきました。月日のほうが少し経ってございますので、改めて御紹介を何点かさせていただきたいと思います。

まず、津市立幼稚園長会からは、公立幼稚園は特別な支援が必要な子どもたちや外国につながる子どもたちなど、一人一人を大事にする教育を目指し、また保護者とのつながりも大事にしていく中で、小規模であることも強みにして、子どもへも保護者へも丁寧な対応をしてきたいというような御意見でありますとか、架け橋プログラムの取組については、まずは公立幼稚園が率先して私立の幼稚園や保育園等を利用していきたいというような御意見をいただきました。

津市ＰＴＡ連合会につきましては、懇談会のテーマが教育大綱ということで、色々と事前に勉強もしていただいて多方面に渡って御意見をいただきました。特に印象的でしたのが一番上にございます、子どもたちの意見を反映していくような「子どもたち目線」での大綱を盛り込んでいただけないでしょうかというような御意見でありますとか、一番最後にございます国の教育進行基本計画に「ウェルビーイングの向上」とありますが、子どもたちだけでなく、教員のウェルビーイングについても、津市はどう進めていくのかを考えながら、夢のある先の明るい教育大綱にしてほしいというような御意見をいただきました。

津市小中学校長会からは、教育の最大の環境は「教員」であり、教員が子どもと向き合う時間だけではなくて、質の確保も必要です。教師は子どもたちが憧れ

る職業であり、教師が資質・指導力などを学ぶ力が重要ですというような御意見でありますとか、学校運営協議会については、これまで年齢層が高い人が中心でしたが、若い力も必要と考えて構成を見直したら非常に上手くいったので、若い方が参加いただけるような仕組みづくりが大事ではないかというような御意見をいただきました。

三重県教職員組合津支部からは、支援が必要な子どもたちに対して、個別の支援をしたくても欠員等により非常に厳しい状況にあり、また、部分休業を取りたくとも実際取得出来ない状況にあるとか、施設面においても給食室の天井が剥がれていたりとか、人的にも施設面でも非常に厳しいような職場環境の状況をお聞かせいただきました。

こういった意見様々いただきましたものを総括いたしまして、事務局案としまして資料２ということで､骨格案というふうにまとめさせていただいたのですが、骨格案というよりは、そもそも載せていきたいような事柄でありますとか載せていくべきような事柄を、事務局で整理をさせていただきまして、５つのカテゴリーに分けて整理させていただきました。これは、現状の教育大綱が３つの柱と言いますか、教員が子どもたちと向き合う時間の確保など、３つの柱からなっておりますが、新大綱については５つの柱でというようなことでは決してございません。様々な御意見をカテゴリー別にまとめると、こういう形になったということでございまして、さらに、丸の１番から１６番まで番号を振ってございますけれど、これについては特段の意味はございません。ただ、例えばこれからの公立幼稚園が目指す姿というようなことで言いますと、幼稚園に関わっての記述というのは、現大綱の中では後半のほうに少し出てくる程度でございますので、懇談会で様々出された前向きな意見等が、新大綱ではもう少し目立つところに載せていただけないかなというようなそういった事務局の思いも込めまして作らせていただいた次第でございます。

なお、一番右端の１６番の放課後児童クラブの話につきましては、懇談会で特に意見がございませんでしたが、放課後児童クラブ、子どもの居場所の確保という意味では大変意味がございますので、ぜひ大綱にお加えいただけないかなということで、事務局として載せさせていただいた次第でございます。

説明は以上でございます。よろしく御協議のほどお願い申し上げます。

津市長　今の大綱が令和２年１月で、普通のやり方というのは、これができたかどうかというレビューから入って、この大綱との関係でどういうふうに作るかという議論をしていくのですが、私は敢えてそれを避けたいと思いました。その理由は３つぐらいありまして、１つはこのレビューから入ると、これはかなり出来ましたので８０点、これは６０点、これは２０点ということになって、では８０

点のものはさらに１００点目指しましょう、６０点のものは何か問題があるのですから、少し角度を変えて議論しましょう、２０点のものはもう全然駄目で、これはもう捨てますか、それとも全くのゼロから出直しますかというような議論になるので、そのフレームでの議論になってしまうという、これに捉われすぎるというのが１点目。

２点目は、今の大綱を作った時も、網羅的にきちんと精緻に書こうというよりも、今これが大事だよねとか、我々今回もやりましたが４つの団体をはじめ現場から聞いている話の中で、教育政策の展開に対する期待みたいなものを、体系というよりも言わばやらなければならないと、その時考えていたことを中心に、パッパッパッと拾い上げて出来ましたとやったものですから、その作った時のやり方からすると、今みたいな全部をレビューして、そしてここに書いていないことを、むしろ目を皿にして探すというのはあまり意味がないかなと思ったのが２点目。

３点目は、教育は今、やらなければいけないこと、やることを期待されることというのが２、３年でかなり変わりますよね。もちろん教育行政はずっと継続しているのだけれども、その中で特に注目しておかなければいけないこととか、しっかり考えて乗り遅れないようにしなければいけないことというのは、私の実感で言うと、毎年毎年変わっているような気がして、そうなると今一番フレッシュなものをしっかり書き込んでおくというのが何よりも必要であって、前回の大綱に捉われている暇はないという、そんな思いで今回はあまり捉われないでやってみようということを、私は思いました。

それで、全く真っ白のキャンバスに何を書くかということなのですが、教育を施す側の議論もさることながら、やはり子どもたちにとって、学校で楽しく勉強していて、何か生き生きするような教育政策を展開するためには、こういう教育がなされていればいいなとか、何かそういう目標みたいなあるべき姿というか、こうあれば良いなというようなものを書いて、それに向かって皆が努力していくというか、進めていくような、そんな教育大綱にすれば、きっと教育振興ビジョンだとか総合計画だとかとは違う独自の存在感を示すのではないかなと思っています。そのヒントになるようなことが８月２日と７日にあった会議で、大分出たかなと思います。そこから意識して、事務局で引っ張り出してもらったのが、今の骨格案という名前が相応しいかどうかは別にして、事項の言わばピックアップでありますので、ずっと目を通していただきながら、これに捉われることなく議論していただけるというふうに思いますので、どうぞ御自由に御発言を願えればと思います。項目別にいくよりも事前に見ていただいたと思いますので、少し気になるところとか、あるいはここは少し言っておきたいなと思うところを、どうぞ御自由に御発言を願えればというふうに思います。

ではどうぞ。準備万端で構えておられると思います西口委員、お願いします。

西口委員　今回の懇談会で協議した時に、子どもたち目線で子どもたちの意見を拾っていく、反映していくということを大綱に取り込んでほしいというＰＴＡ連合会の御意見がありましたけれども、教育ニーズというのは本当に多様化してきて、今後もますます多様化してくると思うのです。そんな中で子どもたち誰一人として取り残さずに全ての子どもたちの可能性を引き出していくような、そんな教育を、津市は展開していかなければならないと思っています。

そのためには自分の中で思っていることがあって、それはやはり教員の人材確保に尽きるなということを思うのです。人材確保も教員で必ず欠員がないようにするというのがもちろんですが、教員以外でもできるようなこと、例えば支援員とかスクール・サポート・スタッフの方がいますが、そこを充実させながら人材確保をきちんとしていく、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなど色々と支えるところの人材確保をきちんとしていかなければならないと。一番は教員の人材確保だと思いますので、津市の広報で誰か免許を持っている人、来てくれませんかというようなことを積極的に呼びかけるとか、学校の給食会計とか、まだまだ教員が担っているところもあるような気もしますので、そういうところを教員以外の人にもってもらうなどしながら、本当に教員が子どもたちに向かっていける、そういう向かい合う時間がきちんと確保できるような人材確保が一番最初に来てほしいなということを思いました。

それから２つ目に思うのが、コロナの影響で皆が内にこもりだして、今日の新聞にも不登校が全国２９万人を超えているということが出ていました。去年の２割増しということで、見てみるとやはり人と人とがつながっていくことが、すごく薄くなってきているのです。私ボランティアをしていまして、９月に入ってから、登校してこない子が何件かあって、朝のボランティアをしていると、連れに行ったり色々なことをしながら、やっと１０月になって来られるというようなことがあったのです。また、もう一つ別の仕事で、民生委員をしていて、中学校では不登校で、中学校を卒業した後はどうしたらいいのというようなことを相談されることがあって、学校にいる間は不登校でも、学校は、教員は積極的にその子に関わるのですが、学校を卒業してしまうと、その後積極的な支援がなく、福祉になると自分が申請しないといけないので、学校教育と福祉との連携というあたりは今後大事にしてほしいし、これは教育委員会だけじゃなく、皆で子どもたちを健やかに育てていくということを、やはり打ち出していきたいなということを、学校と福祉の面で思いました。

３つ目は、ＩＣＴをもっと積極的に活用して、やはり子どもの欠席連絡など色々なことで、教員の負担が少しでも減るような形でいけたらいいなということを、

今度の大綱で出てくるといいなということを思いました。また、この骨格案に書かれている幼稚園と放課後児童クラブについても、絶対に載せて欲しいと思っています。

津市長　西口委員、ありがとうございました。
　そうですね。ですから今、非常に良い方向のお話を頂いたと思うのですけれど、やはり「施策の大綱」なので、こういう施策をやりますとか充実させますというところから書きたいのですが、そうするとそのことが自己目的化してしまうので、むしろおっしゃったとおり、人材確保に我々も努力しますとか人材確保をしましょうとか、そのためにということで、例えば…みたいな感じで、潜在保育士ならぬ潜在教師というのですか、免許を持っているけれど教壇に立っていない人、こういうところをどうやって確保するかとかね。それから給食会計の話も、前から給食会計そのものについては出ているのですが、それに対して色々なお金がかかるだとか、何だかんだという理由で出来ていないのですが、明らかに教員の負担を外していくにはそれがいるよねというような論理がずっとつながってくると、良い大綱になるのではないかと思いました。ありがとうございます。
　では富田先生お願いします。

富田委員　はい。私は８月７日には出席できなかったのですが、８月２日の懇談会に出席させていただいて１番印象に残っているのは、「子どもたち目線」というところです。「こどもまんなか社会」ということも出てきておりますし、西口委員からも出た子どもたち目線というところが、とても印象に残っているかなと思います。
　特に保育の現場では、今世紀に入ってから特にだと思いますが、子どもたちが１０年後、２０年後に育っていった時にどういう社会になっているのか分からないから、そのための備えとして、要するに将来の不安に対する備えとして、様々な力を身に付けさせようということになっています。あれもこれもというふうに、道徳の教科化もそうですし、ＩＣＴを活用した教育のＧＩＧＡスクールもそうかなと思いますが、プログラミングも入ってきて、とにかく様々な取組というものに対して、それが多様化していくことに、どんどん対応しています。これは保育の現場も同様です。ただ、そういう中で、子どもたち目線というところが置き去りにされてきているという実情があるかと思います。
　結果として、子どもたちの中から様々な生活の豊かさであったり、遊びの充実というのが奪われてきているという現状もあるかと思います。ですので、今一度そういうところに立ち返るというのは大事なところかと思います。

具体的にということになってきますと、やはり人的環境の充実というところになってくるかと思います。人的環境の充実というところでは、教員の人材確保というところになってきますし、そのための教員のウェルビーイングという話も出てくると思います。子どもたちと向き合う教員というところが人的に充実をしていないといけません。子どもたちにとっては多様な人と出会っていくことが、すごく大事なことなのです。

子どもの貧困ということも言われますが、子どもの貧困の中では、特に乳幼児期に関して言うと､子どもが接する大人の数が減っているということがあります。特に貧困家庭ほど、子どもは、家の中でお母さんとしか出会っていなかったり、近所のお友達と遊ぶことも全くなく、他の人と出会うという機会が奪われているというのも、子どもの貧困として言われているところです。やはり教育の現場の中で、様々な地域の人たちと出会うというのが、非常に大事かと思います。

教員の資格、免許を持っている者と出会う以外にも、地域に開かれた学校という面で、子どもたちが学校生活の中で、教員以外の色々な人と出会えるようなことを考えていくのも、地域とつながることの一部になってくるかと思います。

クラスでの子どもの数が少ないと、子どもが何かと出会う機会も増えていく。逆に子どもの数がクラスの中で増えれば増えるほど、保育の環境の中で、その子がそこにあるおもちゃであったり、何かと出会う機会というのは奪われていくのですね。ですから、そうした物的環境という面では、子どもが接する大人がたくさんいて、１クラスの人数が少なくなると、やはりそこは地域にすぐにつながるのかと思います。全部理想論みたいな話ではあるのですが、ここに挙げられたことを見ながら、少し考えたということです。

津市長　ありがとうございました。地域との接点をそういう観点でね、有機的につなげてくというのは非常におもしろいですね。これもいつも学校が地域に対してオープンにしていきましょうという､いつもそのことだけで語られるのですが、今、富田委員がおっしゃったように、子ども目線で書けば子どもが地域の人と接するというのはこんなに教育的な意味もあるよねというような書き方をしたらいいですよね。ありがとうございました。

では、山口委員。

山口委員　２つありまして、１つは、切れ目がやはりあってはいけないということ。架け橋プログラムということもあるのですけれども、これからの教育の姿を迎える上で、幼児教育、義務教育もしっかり行っていく上で、ものすごく大事であり、分断されてはいけませんし、そのつながりの中で、私たち大人が違った接し方をしてはいけないですし、公立幼稚園だけではなくて私立の幼稚園、私立の

保育園とか様々ありますので、やはり管轄するところに捉われずに、幼児は小学校に必ず行くわけで、義務教育をやっていくわけですよね。そこをしっかりとつないでいくことができるのが、教育大綱なのかなと思っています。そして地域とつないでいくために、地域の大人が長期的に子どもたちを見守っていくことが必要で、そこに学童も含まれる気がしていて、学校教育現場だけではなくて、放課後もきちんとつないでいく。学校中心であっても地域中心であってもいいと思うのです。地域の事情もあるでしょうから。きちんと子どもたちを中心に見ていくことが大事なのかなと思います。

もう１つは、インクルーシブと書いてあるのですが、本当に多様な環境の中で多様な子どもたちがいて、この津市の中で育っているわけで、一人一人を見ていく、何が正しくて何が悪いかではなくて一人一人が違って良いですし、違った対応を持って違った考えを持っていて良いということだと思うのですね。実際に今、社会がそういうふうになっているので。インクルーシブというところを体現していかなければならないのかなと思っていて、そのためには先生方の向き合う時間も大事ですし、先生方自身がそういうふうに接していく、支援が必要な子どもたちとの触れ合いとかをしていくとか、できることは多分あると思うのです。色々な人がいて、色々な考え方があって良いという、子どもたちが中心であれば、多様性を感じていくことが出来ると思うのです。そういうことが骨格案の６番とか９番とか１２番とかでも書かれていて、子どもたち一人一人のウェルビーイングが確保されることで多様化に対応でき、安心して学校に通えることができるよう、一人一人を見ていけば、登校しづらいことに少し向き合っていけば、カバーできれば、不登校の削減にもつながっていくのではないかなと思っています。

そういった２つの視点を持っていいかなと思います。

津市長　そうですね。教育委員会がとか、あるいは津市がという主語で書こうとすると、なかなか書けないことなのですが、逆に今、山口委員がおっしゃった、子どもからすれば大人が決めている範疇とかは関係ないので、それから私が、または僕が隣の友達とは違うのだけれども、それぞれが違っていることは認められていて、大切にされるってことを享受できるような、そういう教育であってほしいという感じですよね。

ＰＴＡさんが子どもたち目線でと発言され、教育施策は子どもがするわけじゃないので、えっと思ったけれど、ひょっとしたらこの話終わった時に私言いたいのですが、子どもたちにとってこういうふうな学校だったらいいなとか、こういう教育がされていれば、こういうふうに時間を過ごせればいいなと思っていることを書いてみると、それを我々はどうするかって自然と出てくるかもしれないなと思ったりしています。

全然そんな教育大綱を見たことがないから､本当に書けるのかと思うのですが。
はい、田村委員どうぞ。

田村委員　すみません。同じようなことなのですが、自分なりのことを申し上げるといくつかありまして、まず幼稚園。これは、どこまでいっても公として絶対離してはいけないものがあるはずで、私はそれを具体的にうまく言えないのですが、そこは絶対離しませんよという市長の市民への約束といいますか、メッセージみたいなものが大綱の中で共有されたら良いなと思います。ここの取りまとめの中で書いていただいてあるような歴史、伝統、文化、これは大切なのですけれども、そんなこと言っていられない状況で、毎年毎年、報告を受ける度に園児数が減って、この園も危ないかもしれませんと話も聞いておりますが、少し何か違うことを考えていかないと、とんでもないことになると思います。
それから皆さんおっしゃられる子どもたち目線のことも、私は懇談の時、印象に残りました。そこは、他の方がおっしゃられたので申し上げませんが、もう１つ、保護者の方がコロナ禍というのがあってか、先生方と向き合うという、そういう関わりを持つ機会が非常に減った、もっと先生方と接触といいますかコミュニケーションみたいなものが欲しいというような御発言があったのが、私はすごく印象に残っています。三教組の先生方からも、逆の立場からも、保護者さんとの関わりというか、つながりというのは持っていてですね、確か･･･

津市長　球技大会の話ですね。

田村委員　そうです、同じことを思っているのですが、そのきっかけがうまくない中で、忸怩たるものがあるのかなというのが一つ懇談会の中の印象です。そういう意味では、ある程度はピックアップはしていただいていますけども、教員が保護者と向き合う時間とか、そういうことをどう捉えているのかについても必要なことなのかなと思います。
あと、地域のつながりにおいては、芸濃の校長先生だったと思うのですが、学校運営協議会の中に敢えて学生を巻き込んだら雰囲気が変わって、少し良い方向にいっているので、それを全市に広げてはというような御提案もあったかと思います。あれも非常に印象に残っていて、大事なことかなと思っています。
最後に、やはり放課後児童クラブ。これはすごく予算もかけて取り組んでいるのでしょうが、お困りの保護者の皆さんもいらっしゃると思いますので、どういうふうにしているのかというのを、やはり何か大綱の中でお示しいただくほうが安心されるのではないかと思います。
以上です。

津市長　はい、ありがとうございます。
　ですから幼稚園なんかもですね、公立幼稚園を絶対手放しませんよとかいう大綱というよりも、多分、こういう幼稚園がやはり必要だよねとか、いるよねとか、あればいいよねという話をして、それを誰も私立さんやらないでしょうから、津市がやりますよとか、そういう話なのです。ですから学校運営協議会に若い人を入れますと言うと、校長目線、教育委員会目線になるのですが、若い人が学校運営協議会で何か色々な意見を言っているような、そういう町にしていきますと言ったら良いよねという話なのかなと。
　はい、ここまで言いましたが、教育長、一つこの辺で路線を正しい方向に。どうぞ。

教育長　市長が最初に、こうあればいいなという、そんな姿というのがあり、また、具体な話は委員さんが言われたので、自分の中でこうあればいいなというのを少しお話させていただくと、先程、子どもたちの意見をというような、子どもたちの考え方を生かしていこうという前提には、子どもたちの意見を言おうとしないと駄目だと思うのです。言う気にならないと。今の子はなぜ言わないかというと、結局言ってもその達成した姿というのを実感出来ていなかったり、つまり何が言いたいかというと、実はこの前、教育委員会事務局の指導主事に色々話をする機会があって、こんな話をしました。１８歳の成人の意識調査というのがあって、アメリカ、イギリス、中国、韓国、インド、日本の６カ国で調査をした時に、自分の行動で国や社会を変えられると思いますかということを１８歳の人に聞いたところ、日本は残念ながら最下位で、２６．９％でダントツで最下位だったのです。トップはインドでした。今そういうふうな流れよく分かるのですが、それは決して子どもたちのせいではなくて、きっと我々がやってきた教育がそういうことなのだろうなと。つまり、やってきたことが達成されたり、やって良かったなという達成感をもっと感じることが出来たら、もっと自分が頑張れば、世の中が変わるかもしれないとか、自分の意見でひょっとしたら学校が変わるかもしれないなと感じるようなことをしてきてなかったのかもしれないなと思ったのです。
　それともう一つは、自分の意見が言えるためには、やはり話す力とか使える力がいるだろうと。なかなか言いたくても言えない子というのは世の中にいっぱいいるわけで、それをどうやっていくのか。この前、教育委員会でこんな映画見たのです。「こどもかいぎ」で、本当に良かったです。幼稚園の子どもたち、年長の子が７、８人で毎日何かのテーマで話合いをするのです。例えばあなたが将来結婚したいですかと、そうすると家のことがいっぱい出てきて、本当にたわいもないことなのですが、そんなところから全然話せなかった子が、どんどん自分の

ことをいっぱい発信するようになってくる。幼稚園の子もそういうことは出来るのですよね。でもそういうことを小学校、中学校でつなげているかということだと思うのです。ですから結局、子どもたちの意見とか子どものことを反映していくためには、やはり普段の中でそういった達成する経験であったりとか、やって良かった、自分たちの考え方が何かに反映されたりとか、そういうことを経験させていくことがとても大事だなと思っていて、何かそんなことが背景にある中で、やっていきたいなというのが一つ思います。

その中でも基盤となるのが、やはり幼稚園、就学前の教育からスタートになると思うので、その中で公立幼稚園の意義というのは、２番の前半部分、ここに尽きると思っています。歴史とか文化がどうとかではなくて、今、架け橋をやっていく中で、公立幼稚園の役割というのを、保育園とかこども園とか私立幼稚園にもしっかりと発信してやっていくのだという、中心としての役割、存在意義があって、そのためにどうしても残していくべきであり、残していかなければならないということを、発信したいなと思っています。

後の細かいことは、ここに書かれていることを具現化していくことなのですけれど、もう一つは、最後までずっと書いている「ウェルビーイング」です。結局、子どもたち、教員、そして地域の方、保護者の方、それぞれが良い状態であるためには、やはりそれぞれがつながっているということなのです。それぞれがつながり合って、子どもの姿が輝いていたら教員も輝くのです。教員も輝いていたら子どもも輝いているのです。そこが片方では絶対駄目なのです。そういったところの関係性をまずやっていくためには、今、色々な方が言われているような人材確保であったり、様々なことが絡んでくるのですが、そういったそれぞれが輝くことによって、教育の質は上がっていくと思います。なので言いたいのは、大前提として、色々な経験をして達成感をいっぱい得られる、そんな教育が出来たらいいなと思います。今もやっているのですが、もっとそれが子どもたちに実感できるようになっていくといいなと自分は思っています。

津市長　はい、ありがとうございます。

総合的な施策の大綱、これは法律で書いてあるのですが、地教行法にこの言葉が出てきています。施策の大綱と書かれると、普通の役所の人たちにとっては、施策というものが、たくさん、しかも体系的に百幾つもあって、それをコンパクトにまとめて大綱として要約していくようなイメージなのですが、私としては、シャワー効果みたいなイメージがあって、大綱というのは、例えば今の教育長の言葉を変えれば、子どもたちも教員も輝いている学校をつくりますというような言葉が書いてあって、そのために何をすればいいかというのがバーッと分かれてくるような、そんなイメージのことを書けば、すごく広がりがあると思うのです。

それで一人一人の校長が、あるいは教員が、私が輝く学校ってどんな学校だろうと考えたら、こういうふうになればいいなということがいっぱい出てきて、それがまたお金がいる話であったら予算要求が出てくるだろうし、あるいは人がもっと欲しいという話だったら、ここに人事要求が出てくるだろうし、お金をもっともらいましょうとか、人をもっと付けましょうと言っていると、それが結局お金を配ること、人を確保することが自己満足になるので、なかなか息苦しい教育大綱になってしまいます。そういうイメージが、段々と広がってきています。

では一通り回りましたので、後は自由に御発言を願えればと思います。どなたからいきますか。

田村委員　先程、市長がおっしゃられた幼稚園の件、私も公立幼稚園は絶対無くしませんというふうに･･･

津市長　書きたいのではなくて。

田村委員　はい。やはり、最後の最後まで幼児教育、保育において、ここは絶対責任持ちますよというのがあって、それを実現していくためには、公立幼稚園として必要なので、維持していきますというストーリーなのかなと思います。このままでは、どんどん自然消滅、休園、廃園になっていくので、具体的な政策としての何らかの手を打っていかないといけないというのが、教育委員会の課題ではあるというところであります。

それと、この間の教育委員会で教育振興ビジョンの４年の最終年度の点検評価が議題として挙がったのですが、この教育大綱にある教員が子どもと向き合う時間というのがあって、平成３０年度の時は２０時間ちょっとだったのが、６５時間以上で3倍ぐらいまで、目標達成までいっています。それで人材確保という面では、市長も前からおっしゃってみえるように、あくまでも採用人事に関しては県の所管でありますので、市、町ではどうにもならない面もあるとは思いますけれども、このように、先生には先生にしかできないこと、教員には教員にしかできないことをしていただけるような環境をつくるための施策というのが、市でも可能かなと思いますので、そこをどうしていくかというのが、やはり具体策としてはあるのかなと思います。

山口委員　やはり先程、教育長も市長も言われましたように、目的を見失ってしまうことがあって、何のためだったということがよく会社でもありますし、そもそもＡＩ時代ということで、ＡＩも何のためにあるのかということが、今後はすごく重要になってくると言われています。現場では日々の業務があり、細分化さ

れているところもあるので、絶えず立ち返るようにしておかないといけないと思うのです。だから子どもも教員も輝く学校ということは、そこに地域の人を入れることになるので、そこに立ち返れるようにして、その中で日々やっていることが確認できるようなものだったらいいなと思いますし、その中に一人も取りこぼさないという視点を入れておくと、じゃあ皆取りこぼさないというようになって、輝けるようになっていくのかなと。

何のためにというのが非常に大事かなというふうに思いました。

富田委員　先程、お話させていただいたことと重なってしまうのですが、最初に市長が、「子どもが楽しいと感じる生き生きとした、そういうものに」という話もあったかと思うのですけれども、ここ数年というか、今世紀に入ってからというのは、将来への不安から、どんどん子どもに色々すべきことを求めていくというか、「多機能であるということが、すごく良い人間なのです」というような、そういう人間像で子どもを教育してきたようなところがあって。それって、なんかこう情報処理モデルというような、非常に情報処理に優れたものをどんどん輩出していこうというような、そんな感じなのですね。でも、そういう子どもの姿からでは、先程、教育長が言われた映画「こどもかいぎ」のような生き生きとした姿は、多分描けないと思います。子どもたちが自分たちで身近なところから楽しさを導き出していくというような姿は、「これが将来の不安を少しでもなくすために必要なのですよ」と、どんどん教え込んでいく、背負わせていくといった教育では、見ることのできない姿かなと思います。ですので、やはり、その辺の発想の転換みたいなところが、今、求められてきているところではないかなと思いました。

そのことは、公立幼稚園の在り方というところにもつながる部分があって、この間に、どんどん実用性とか費用対効果というところで、幼児教育保育施設は地域の中から「小さいものはどんどん削っていき大規模化していこう」というような、「大きい方が良い」という感じで流れていったかと思うのです。でも、そういう大規模化を進めていく中で、それはそれとして良さは当然あるのですが、公立幼稚園というのは、それとは逆行する形でしか、今後は多分、生き残っていけないと思います。逆に「小さいことが良いことだ」となっていったほうが、実際小さいことの良さというのは、ものすごく色々とあると思うのですね。そのことを具体的に打ち出してメッセージとして色々なところに知らせていくというのは、非常に大事なことかなと思ったりもしました。

先程、子どもの貧困の話をしましたけども、子どもの貧困というのも経済的な豊かさの欠如が貧困なのだとずっと言われてきたのですが、そうではなくて、もう一つの側面としては、人との出会いの豊かさの欠如というところも子どもの貧

困へとつながる。ですからその意味では、学校と地域というのをどんどんつなげていくことが、今後は多分、求められていきます。それ自体がまた教員の仕事ですよというふうにしてしまうと、また大変なことになってしまいますから、学校と地域コーディネーターというような別の役割を果たす人を、うまく位置付けて機能させていくことができたら、学校というところが地域の中で、人がたくさんワイワイと集まって、そこで子どもたちも何か子どもたちなりに考えたアイデアの活用について話し合って計画を立てて、それを周りの皆が認めてくれて一緒に楽しんでくれているという、そういう学校の姿が実現できるのではないかと思います。そういうことで、このお話をさせていただきました。

津市長　ありがとうございます。

西口委員　コロナ禍で今までしてきた教育が、曲がり角にきたなというところはあるのですが、その中できちんと人と人とがつながるということが、一度ゼロベースに戻されたような形になったので、市長が出される教育大綱というのは、人と人がつながっていくということを第一歩にしながら、皆が考えていけたらいいなということをすごく思います。

　津市で過ごす子どもたち、さらには教員、保護者、地域、皆と輝くようなそんな教育を推進していくということを何とか伝えていきたい、掲げられたらいいなと思います。子どもの数が減ってきて楽になってきたのではなくて、減った分、一人一人のニーズが出てきて、それに対応しなければならない教育現場、多様なニーズと一言で言いますけれども、それがすごく大きくて、どう対応していったらいいのかということが､本当に今のところ混沌としているような感じがします。ですので、是非、子どもたちを誰一人として取り残さずに全ての子どもたちの可能性を大事にしていく、そんな教育大綱になっていくといいなと強く思います。

津市長　そうですね。ありがとうございます。

　教育長ありますか。いいですか。

教育長　１１番がすごく印象的だったのですが、結局、保護者の方も先生とつながりたいということで、あの時、確か橋北の先生が協力してくれていて、ものすごく喜んでみえたというのがすごく印象的でした。もちろん保護者も教員ともっとつながりたいということは思ってみえると思いますけれど、本当に教員も同じで、個人差があるのかも分かりませんが、保護者や地域としっかりつながってやっている実感というのは、間違いなく教員のウェルビーイングにつながる部分だと思います。ただ、その部分と働き方改革、いわゆる教員の働き方過重労働の

あたりとの関係性というのが、やはり校長先生、現場の先生方は非常に気にされます。

確かに、教員の帰る時間は結構早くなっています。例えば昔、教育困難校で、本当にいつ帰るのかと言って９時１０時というような時間であった学校が、今は７時ぐらいになったら、７時も良くないのですが、学校にほとんどいない状況になってきている。ということは、それだけの色々な整理などが当然されているのですが、ただ本当に教員としてやっていくべきこと、これが非常に難しいのですが、コロナでやらなくて終わっていったことが、今こうして戻った時に、本来必要なことであるのに、それもやらないままになってしまっていたり、本来すべきことをやらないままであることが、どうなのかというあたりの検証について、もっとやっていかなければならないと思っています。ですので、確かに色々な場面で、働き方ということは大前提、大事なのですが、教員として何を大事にするのかというあたりについては、先程西口委員が言われましたけれど、今のコロナの影響というのはもちろん、色々と意味があると思うので、そこは考えるべきときなのかなと。そのあたりを次期教育大綱にどうつなげるのか課題です。ただ、大綱には､何を大事にするかということは入れていただきたいなという気はします。要は、教育で何を大事にするのかということですね。

津市長　ありがとうございました。

大分議論が深まってまいりましたので、次に向けてということで少し提案をさせていただきます。

やはり、「津市はあるいは津市教育委員会は何々に取り組みます。」というようなＴｏＤｏリストの大綱は、今回はやめましょう。だからと言って、「子どもたちが何々をします。」とか、「放課後児童クラブにみんな行っています。」というのも､非常に書きにくいので､「津市では子どもがこんなことをしています。」、「こんなことを思っています。」、「津市の学校では、こんな子どもたちの姿があります。」というような、客観的な描写みたいなものを書くことはできないのかと思っております。

例えば１２番で、「子どもたちが安心して学校に通えることができ、また教員が子どもたちと純粋に向き合えるよう」で、後ろは「･･･、これを取り組んでいきます。」と書いていますが、「津市では、子どもたちは安心して学校に通っています。教員が子どもたちと純粋に向き合っています。」そういう姿を目指していますとして、これが津市の今度の教育大綱にします。ただ、おとぎ話とかウィッシュリストを書いている、言わば夢物語を書いているようなストーリーでは、少し責任を果たしていないように思いますし、それはそれで色々な夢が広がって良いのですが、さすがにそう書いた時に、どんな政策の展開が考えられるかについ

て、ツリーで書くように、上のほうにあってシャワー効果的な広がりを持つ感じで書くやり方にして、上のほうにあるのは、例えば「放課後児童クラブを５つ増やします。」ではなくて、「放課後児童クラブに皆が安心してストレスなく行っています。」とあって、そのためには「放課後児童クラブを５つ増やします。」というのがぶら下がっている、こういうふうに言い換えたほうが、すんなりいくのではないでしょうか。

本当に５つ作るのかどうかは、毎年予算化する時に決めていくわけで、この大綱の記述には「放課後児童クラブ５つ作ります。」というのがぶら下がっていますよというような書き方をしてみるのが良いと思います。それは場合によっては参考か、後ろの注とかで付けてもいいかもしれませんし、大綱の記述から展開を想定している施策はこんな感じですと、表にして付けてもいいのかもしれませんね。

そんなイメージで作るということで、ハードルが高いのかもしれませんが、思い切ってやってみたらどうでしょうか。

事務局、何か反論がありますか。今日はこれで終わりたいと思います。ありがとうございました。

事務局　最後に、事項書の２番、その他でございますが、事務局は特に用意しておりませんが、委員の皆様から何かありましたら。よろしいでしょうか。

それでは本日の総合教育会議を閉会いたします。どうもありがとうございました。